植草学園大学研究紀要　第７巻　47 ～ 57頁（2015）

B. Edu. Health Sci. UG Univ.　vol. 7, 47-57, 2015

原　著

ロール・プレイングを活かした物語作りの意味

― 教員（保育者）養成における専門性を高めるために ―

植草　一世[1]　植草学園大学発達教育学部
安藤　則夫[2]　植草学園大学発達教育学部
馬場　彩果[3]　植草学園大学発達教育学部

教員（保育者）養成における専門性を高めるためにロール・プレイング（以下，Ｒ・Ｐと示す）の活用が求められている。しかし教員養成の授業で使うためには課題が残っていた。そのためにＲ・Ｐを充分に活用するために準備段階の方法を工夫してきた。その１つの試みとして，絵本を活用して物語作りをするときにＲ・Ｐをする方法を考案し，その効果を実際のＲ・Ｐと比較して検証した。仲間とともに役割を取りながら絵本の続きを考える活動を行った結果，他者や自分への気づきや，共感的なつながりが深まったことでお互いの立場を理解するといった自己成長の効果が得られた。それは実際のＲ・Ｐと類似した効果であった。その結果，Ｒ・Ｐを活かした物語作りが教員養成のために有効であると確かめられた。

キーワード：教員（保育者）養成，ロール・プレイング，物語作り，絵本，自己成長

１．はじめに

本研究者らは，教員（保育者）養成の学生（以下，学生と示す）の専門性を高めることを目的に，ロール・プレイング（以下，Ｒ・Ｐと示す）活用の授業（以下，授業と示す）を行ってきた。Ｒ・Ｐの体験は，机上の学習を超えた参加者の気づき，自己理解，他者理解の深化が期待され，教育的効果が確認されてきた。そして，そこから得られる人間関係に対する気づきが保育者や子どもの成長にとって重要であるという結論を導いた[1)]。しかし，実際には授業で活用するための諸条件を整える必要があり，その手順や方法を探る中で，本研究の「Ｒ・Ｐを活かした物語作り」に至った。

本研究者（植草）は，Ｒ・Ｐの舞台で展開されてきた親子関係を「象の親子関係」にたとえて，絵本『ぞうのパオ』（本論文p.50「４．絵本『ぞうのパオ』の内容」を参照）を作った。その内容は，子育てをする母象と自立するまでの子象の２者関係を表現したものである。さらに，その物語は中断する形で終わっている。その絵本を学生に読み聞かせした後，学生がその後の物語の展開をそれぞれの「母親象」「子象」「補助と聞き取り」の役割を持って作っていく活動である。本研究者は，学生が登場人物の役割を持ちながら物語を作るという活動によって，Ｒ・Ｐと似た体験を得られるのではないかと考えた。そこでは学生は登場人物として，状況を感じ取り，他の役割を持つ学生と交渉し，問題を解決しながら物語を作っていく。本研究は，絵本に基づくＲ・Ｐを活かした物語作りの活動の成果や意義を学生の活動の様子や感想に基づいて評価考察するものである。

［１］　著者連絡先：植草　一世
［２］　安藤　則夫
［３］　馬場　彩果

２．R・Pについて

2.1　R・Pの定義

R・Pの定義として，「誠信書房　心理学辞典」の中で，外林（1971）は，「文字から言えば，役割をプレイすることであるが，ロール・テイキングと対照して特別な意味に使われる。心理劇的集団療法の１つの技法であるが，その利用範囲は広く心理劇に匹敵する意味を持っている。日常生活における役割行動は形式に束縛され，個人の自発性は失われやすい。こうした束縛をなくし，自発的に役割を演ずることによって人間関係を新しく見直していこうとするものである。心理療法，習慣の改善，教育などで利用される。」[2] と説明している。

2.2　教育の場で期待されるR・Pの学習効果

日本においてR・Pが教育の場へ導入されるようになってわずか50年である。始めに外林大作，時田光人を中心に1962年４月に「千葉県心理劇研究会」が発足し，1975年には「千葉ロール・プレイング研究会」が，教育現場に生かす活動をスタートさせた[3]。平成23年１月には，文部科学省の中央教育審議会によって大学の授業内容の中に，R・Pを導入することが求められるようになった[4]。それは，高度な専門性と社会性，実践的指導力，コミュニケーション力，チームで対応する力，一斉指導のみならず，創造的・共働的な学び，コミュニケーション型の学びに対応できる力がR・Pによって獲得されると，高く評価されたからと思われる。これらの能力があることで将来教員になる学生が教職生活をより円滑にスタートできると期待される。R・Pの学習効果への期待が高まっているのである。

2.3　教育の場で行われるR・Pの構成

実際に教室で行うR・Pは，教室の一部に舞台を設定する（見たてる）。舞台では，架空の状況のもとに，参加者が役割をプレイする。R・Pを担当する教師（授業担当教員）が監督役を行い，生徒や学生の感想を聞きながら進行役をつとめる。スタートに際しては参加者の中から演者（主役）を選び，主役は自分の自由な発想で役割を演じる。それに加えて，相手をする演者（補助自我）と，またそれを観て共感してくれる見守り役（観客）が存在し，主役に協力する。R・Pの舞台では，学習課題をテーマにすることもある。例えば近い将来教師になるであろう学生が教師役を行い，補助自我が子ども役を行うなどして役割を体験する。また役割交換することで演者は多様な役割を経験する。演じた後は，参加者全員でどのように見えたのかを含めて感想を述べる。

2.4　教育的効果

①　R・Pにおける役割（ロール・role）と関係性

R・Pでは演者が演じる役割と関係性を見るため，随時必要な時に役割と関係性の確認を行う。それは，演者や観客などのそれぞれ違った立場からの感じ方や思いなどを聞き，自分や相手の心の動きを捉えていくことによって行われる。

R・Pをすることで，教育・保育技術にも増して子どもの心情や動作を細やかにとらえることが意外と難しく重要であることを学ぶことができたと学生は述べている[1]。子どもの理解が深まるだけでなく，R・Pは，学生自身が多様な役割を獲得し，自分自身を客観的にとらえるためのトレーニングとなる可能性を秘めている。R・Pは，多様な立場の者が同じ土俵で演じ語り合うことを通じて，自分のことに向かい合い，また相手の立場に立つことも出来る。このことから教育・保育に対する基本的な心構えをつくるために有効であると考えられる。

②　社会的役割と心理的役割

日常生活において他人との関係の中で様々な「役割」が生じてくる。逆に役割によって関係が構築されていく面もある。そして人間関係には，社会的役割と心理的役割がある。社会的役割とは社会的要請に従って作り上げられる役割である。例えば親には親の役割がある。それは子どもがいてはじめて成り立つ役割であることは日常生活において認識されているとおりである。心理的役割は，心から見た役割のことである。例えば，人に甘えたいという心を持つ母親では社会的役割を十分にとれなくて，子どもとの関係が逆転したり，「仲良し」を理由に友達のような並列の関係になったりすることがある。これら心理的役割は，日常では何気なく起きているけれど，両者間に問題がない限り当事者が意識すること

はない。ところが人間関係の問題が起きている場合には，心理的役割に起因することが多い。そこでR・Pでは，舞台で現れるその心理的役割を取り上げ確認する。これは舞台で演じた後の演者から「演じた感想」という形で述べられることもあるが，多くの場合にはそれを見ていた観客によって発見される。R・Pを行うことで日常の意識されない心理的役割を再発見し，よりよい役割と関係ができることがR・Pの大きな教育的効果であると言える。しかし，参加者がその場で思いを言えない場合やその場では気づかず「取り残された思い」[5]になる場合がある。

③　自発性

教師の役割として大切なことは，学習者の型にはまらない「自発性」を引き出す授業を行うことである。学習者にとって大切なのは「自発性」である。特に教育の場で行われるR・Pは，教師が前もって準備した設定授業ではなく，学生の創造的な役割学習とならなければならない。自発性とは，「自分自身の意志によって積極的に行為する能力（モレノの用語）である。」[3]。モレノ[6]によれば，「自発性は，現在，今ここで働く。自発性は個人を駆り立てて，新しい場面で適切反応や，以前の場面に対する新しい反応をさせる。自発性は一方では，無意識的な行為や反射性を，他方では生産性や創造性に戦略的に見れば結びついている。」モレノが主張するように，自発性とは新たな場面で挑戦的に行為することである。

外林は「社会的に成熟することは社会的役割を習得し学習することである」[3]と述べている。伝統的行動様式を受け継ぐロール・テイキングをする一方，R・Pは，心理的役割を高めるために行う自発的行為であり，心理的役割を高めることで社会的役割を創造していく活動である。

３．R・Pの課題から本研究へ

以上述べたようにR・Pは，創造的，挑戦的な面がある。学生が自発的に自己表現できるようになるために，かなりの配慮と準備が必要である。参加者が「取り残された思い」になるとR・Pがうまく機能しない。意見の違いや，演じることにストレスを感じることで，自発性が発揮できず参加することに意欲を失うという可能性ももち合わせている[7]。そのための監督（教師）養成研修が行われている。しかし，人の心を扱うだけに，研修には時間が必要であり，しかも継続的に行って行かなければならない。萎縮しやすい，身体的・心理的に大胆に自己表現が出来ない等の制約を感じやすい人であっても，のびのびと役割演技が出来るようなR・Pのウォーミングアップが必要であると考えた。

また実際多くの学生を教える授業という限られた時間や場所等の制約のもとに条件をどのように整えるのかが課題であった。

一方，本研究者（植草）は，R・Pを経験し「取り残された思い」になった経験を表現した絵本『ぞうのパオ』を作った。それを学生に聞かせると，学生は自分が登場人物になったつもりで聞き，自分の今までの生き方を振り返り，新たな成長の機会になることが分かった。そうであるならば，学生が主体的に登場人物の役割を演じながら物語を作れば，さらに学生の成長に役立つのではないかと考えられた。またそのような活動は，上記の課題を解決することにもつながると考え，実際にどのような効果があるかを見るために，本研究を行うことにした。登場人物の役割を演じながら，複数の人が物語を作る活動（以下，R・P的物語作りと示す）では，実際のR・Pとは違って，学生は絵本の物語の中で登場人物となって，他の登場人物を演じる学生と協力し合いながら物語を作っていく。学生はその中で共感されたり，他者の中に自分とは違う思いを感じたり，お互いの気持ちや立場を理解したり出来ると予想される。少数の仲間とゆったりした雰囲気の中でR・Pの役割演技を生かした活動ができるので，R・P的物語作りが学生の成長に役立ち，本格的なR・Pに入る前段階的な活動にもなると考えられた。

４．絵本『ぞうのパオ』の内容

R・Pの舞台で展開されてきた親子関係を「象の親子関係」にたとえて，絵本『ぞうのパオ』[8]が作られた。

図１　絵本の表紙・裏表紙

図２　絵本１頁

ぼくはパオ。ぞうのパオには，すばらしいママがいました。ママには，かわいいぼうやのパオがいました。パオは，とてもいい子でした。

図３　絵本２頁

ママは，いつもパオのことを考えていました。パオが大きくなるように，おいしいごはんを用意しました。「パオのために……」

図４　絵本３頁

りっぱになるように，よい学校とよい友だちをえらびました。

図５　絵本４頁

パオは，ママと同じくらい大きな体のぞうになりました。ママにとって，小さいときとかわらずかわいいパオでした。

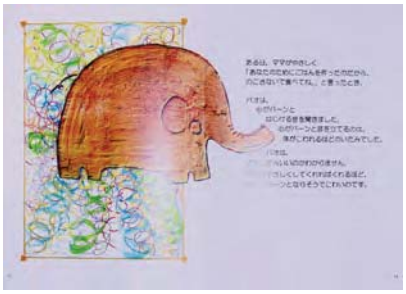

図６　絵本５頁

ある日，ママがやさしく「あなたのためにごはんを作ったのだから，残さないで食べてね。」と言ったとき，パオは，心がパーンとはじける音を聞きました。心がパーンと音を立てるのは，体が壊れるほどのいたみでした。（中略）ママがやさしくしてくれればくれるほど，また，パーンとなりそうでこわいのです。

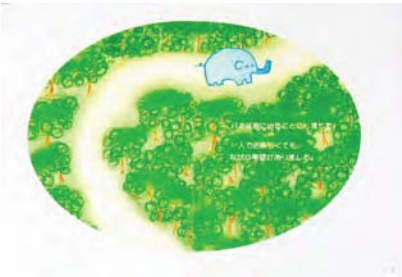

図７　絵本６頁

パオは旅に出ることにしました。一人でさみしくてもなぜか希望がありました。

図８　絵本７頁

夢にはやさしいママが出てきました。

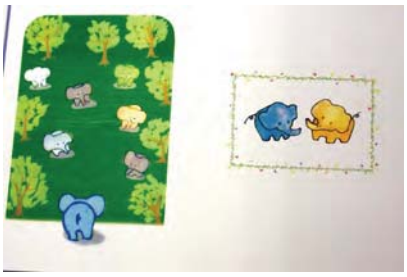

図９　絵本８頁

最後の頁は，なにも書かれていない

５．研究の目的

Ｒ・Ｐから出来た絵本（親に保護された環境から自立に向かう内容）の視聴後，Ｒ・Ｐ的物語作りを行い，その実際にどのような教育的効果があるのかを検証し，Ｒ・Ｐとの特徴の違いを整理する。このことを通じて，Ｒ・Ｐ的物語作りが，教員・保育者養成に活用できるかを確認し，本格的なＲ・Ｐの前段階となりうるかを検証する。

６．方法

絵本『ぞうのパオ』を視聴した学生に感想を書かせる【調査１】。次に絵本『ぞうのパオ』のストーリーを共通理解した学生が３人グループを作り，「子象」「母親象」「補助と聞き取り」の３役を決める。絵本『ぞうのパオ』の続きを「子象」「母親象」で会話することで物語作りを行う。「聞き取り」はお話しを聞き取る。物語作りを完成後，その学生に【調査２】を行う。

6.1　調査日

平成26年６月26日

6.2　調査対象

Ｕ大学　授業科目「絵本・児童画演習」
受講者：49名

6.3　場所　　Ｕ大学の多目的演習室Ｉ

6.4　調査の方法

【調査１】自由筆記方式で行う。

【調査２】アンケート調査を行う。マークシート及び自由筆記方式の質問紙によるデーター収集。マークシートは，質問事項に対し「そうである」「ややそうである」「ややそうでない」「そうでない」のうち１つを選択させた。

6.5　調査項目

【調査１】絵本『ぞうのパオ』を視聴した後の感想（Ｊ１）

【調査２】物語作りとその感想：項目Ｍ１～Ｍ８は４択法。項目Ｊ２は自由筆記。Ｍ１：自分が思いついたストーリーとなった。Ｍ２：自分では思いつかない意外な展開となった。Ｍ３：物語作りの内容は，パオと母親は対立的な関係が続いた。Ｍ４：パオと母親は理解できた関係となった。Ｍ５：結末には，パオは自立できた。Ｍ６：パオは，母親に甘えられるようになった。Ｍ７：物語作りの過程では，パオは自分のこととして考えた。Ｍ８：親の立場を理解するに至った。Ｊ２：絵本『ぞうのパオ』を視聴した後と物語作りの後の心情的な変化について。

6.6　回収とデーター処理

調査１，２とも，その場で本研究者が回収。アンケート調査のマークシートの回答は普通紙マークシートソフト「正一郎２」で集計した。感想等自由筆記は，共同研究者でカテゴリーを作ってまとめた。

6.7　倫理的配慮

個人情報には十分配慮し，個人が特定できるデーターは載せていない。得られた記録は本研究以外には用いない。

７．結果

7.1　【調査１】の結果

Ｊ１：絵本『ぞうのパオ』の感想（自由筆記のため複数回答となっている）

【パオの立場】（39名，79.6％）

「パオは自分のことのように聞いた。自分の経験と重なる。パオの気持ちが伝わる。」「パオがかわいそう。グッときた。」「いい子でいるには自分を押さえることと思っていた。」「自分はどうすればいいのかと，自分と照らし合わせた。」

【母親の立場】（18名，36.7％）

「パオの気持ちが理解できない。」「自分たちの年になれば親の気持ちが分かるし，共感できるのが当然だと思う。」

【両方の立場で】（35名，71.4％）

「立場によって考え方が変わることを実感した。」「お互いを思っているのにずれがある。伝え方が分

からない。」「どちらの心情も理解でき，複雑である。」「苦しかった。お互いを思うからこそ生まれる苦しさを感じた。」「親子関係の難しさを感じた。」「両方の立場で考えると，感情移入は出来なかった。」

【成長について考えた】（35名，71.4%）

「成長していくと優しく大切に育てられても，親の言動を重荷と感じる時期が来るのか。」「子どもの成長は，親の愛情，優しさを素直に受け止められなくなるのか。」「成長の段階では，見守ってほしいと思う時がある。」「誰もが経験して大人になる話なのか。」「反抗期は，親子にとって成長のきっかけとなる。」

【親のこと（言葉）について考えるきっかけとなった】（41名，83.7%）

「親の愛情について考えさせられた。」「親の言葉は，子どもに強く残ることがある。」「あなたのためという言葉は，愛情の押しつけと考える。」「親の言葉は，親が気づかずに子どもが苦しんでいることがある。重い。」「本当のよい関係とは何か，考えるきっかけとなった。」「相手の立場に立つのは難しい。」「親の気持ちを考えるきっかけとなった。親の思いを察した。」

【絵本について・その他】

「子ども向きの絵本ではない。絵本は大人にも大切。」「子どもとして，親に対して言えないことを絵本は表現できる。」「心情的な子どもの成長過程が分かる。」「自分だけの問題でなく，苦しいのは自分だけでないと思った。」「親子のすれ違いがよく表現させていた。」「重い内容と受け取った。」「お話の最後が，自立していくようでうれしかった。」「この続きが聞きたい。」「絵が可愛い。優しい。ぞうの優しい雰囲気が伝わる。」「象だけれど，実際の人間の関係でも起こりうることである。」「終わりがはっきりしないので，考えさせられた。」「どのような関係を築いていくのか，続きが気になった。完結していないので気になる。物足りない。」「いろいろ考えさせられる絵本だった。」「答え探しの旅の絵本だと思った。」

7.2 【アンケート調査】の結果

Ｍ１：自分が思いついたストーリーとなった

・そうである，ややそうである（41名，83.7%）

・そうでない，ややそうでない（８名，16.3%）

Ｍ２：自分では思いつかない意外な展開となった

・そうである，ややそうである（25名，51.0%）

・そうでない，ややそうでない（24名，49.0%）

Ｍ３：物語作りの内容は，パオと母親は対立的な関係が続いた

・そうである，ややそうである（13名，26.5%）

・そうでない，ややそうでない（36名，73.5%）

Ｍ４：パオと母親は理解できた関係となった

・そうである，ややそうである（42名，85.7%）

・そうでない，ややそうでない（７名，14.3%）

Ｍ５：結末には，パオは自立できた

・そうである，ややそうである（36名，73.5%）

・そうでない，ややそうでない（13名，26.5%）

Ｍ６：パオは，母親に甘えられるようになった

・そうである，ややそうである（26名，53.0%）

・そうでない，ややそうでない（23名，47.0%）

Ｍ７：物語作りの過程では，パオは自分のこととして考えた

・そうである，ややそうである（26名，53.0%）

・そうでない，ややそうでない（23名，47.6%）

Ｍ８：親の立場を理解するに至った

・そうである，ややそうである（39名，79.6%）

・そうでない，ややそうでない（10名，20.4%）

Ｊ２：絵本『ぞうのパオ』を視聴した後，または物語作りの後では心情的な変化があったか（自由筆記のため複数回答となっている）

【お話や物語作りへの思いと内容】では，「最初に絵本を聞いたときには，両方の立場で考えた。物語作りは，二人の関係の大切さを考える話になった。親子ですれ違いがあっても，きっとどこかでうまくいくときがくると信じたくなった。」「物語作りでは，対立した関係で終わらせたくなかったので，仲良くなれるような話を考えた。」「母親にパオの気持ちを理解してもらい和解した。親子なのだから仲良くなってほしいという思いが強かった。」「絵本の親子の関係が良くなってほしいという思いがあったので，続きの話が作れたことで，自分の中で完結した。」「お話しの続きは，自然にパオは母親に甘え，自立していくことになった。甘えは必要なのだ

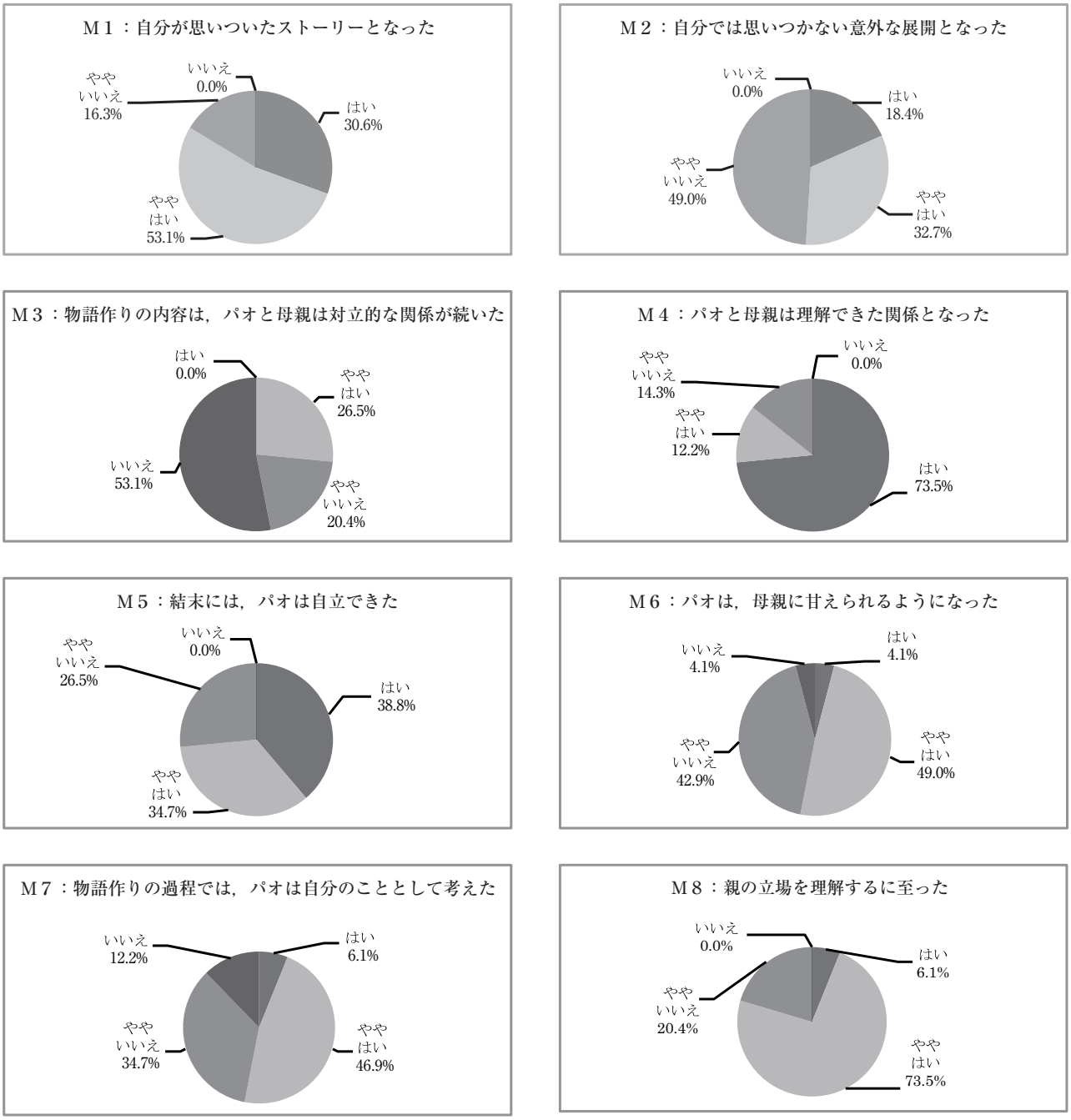

図10　【アンケート調査】の結果

と思った。」「絵本のパオは自分の思いを話さずに旅に出てしまったが，旅に出る前に話し合いを行うストーリーとなった。」「物語作りの過程で，親子の絆を失いたくないという心境になった。」「物語作りでは，パオが自立し新しい家庭を作り，親となってはじめて母親の思いに至るという内容である。ただのハッピーエンドとは違ってよかった。」

【仲間と一緒に作ったこと】では，「自分の思いを仲間と共有できたので良かった。」「絵本を視聴したときには，物足りなさを感じた。仲間と続きを考えられたことに満足した。」「絵本視聴後は，母親の自己満足的な愛情に反発し，パオの立場に立っていた。パオが大人になることで今までの関係とは違った関係となったことに気づいたことで，絆が深まったというストーリーになった。」「物語作りは，とても楽しく，周りの人と話し合うことで自分では考えもしなかったストーリーを聞くことが出来た。」

【関係や役割の中】では，「グループのメンバー３

人は，誰もが親子関係が良い方向に行くといいと思っていた。しかし，自分は子の役を取って物語作りをしていくうちに，親の主張があって思うようには行かなかった。それがおもしろかった。」「ストーリーを考えるのと役割でお話になっていくことの違いを感じた。」「パオの立場に立っていたので，反抗したい気持でスタートしたが，相手役の人（母親役）と話しているうちにそうはならなかった。反抗的だった自分が恥ずかしくなった。」「絵本の視聴は，第三者で聞いていたが，物語作りはパオの立場で当事者となった。その後，グループでの物語作りは，いろいろな立場からの意見があっておもしろかった。」「絵本視聴では分からなかったパオの心情が理解できたと思う。関係の中で思うようにならないことがあることが分かった。自分の思うような話にならなかったことが意外でおもしろかった。」「母親役になったら，急に母親の気持ちになったのが不思議であった。」

【物語作りの気づき】では，「視聴した後は，母親からの自立や，子の自立の寂しさまでは考えられなかったが，物語作りをしたことでいろいろな見方が出来るようになったと思う。例えば，パオの自立の意味や母親への反抗心を考えた。母親の気持ちにも考えが至った。それは，子どもの自立の安堵や，寂しさなどを知ることにつながった。」「絵本視聴時では「あなたのためにご飯を作った」と言う母親は，優しいと感じていたが，物語作りではパオの心情に寄り添うことで反抗的なパオの気持ちを理解した。」「ストーリーの展開や方向は，対立でも，歩み寄りでも自由であることが分かった。そのために，パオや母親の気持ちを深く考えることになった。関係には，いろいろな可能性を秘めていることが分かった。これから人と関わる上でも大切なことであると思う。」「相手と対立するのは，悪いことではない。でもうまく自分の意見を言い得るかどうかが難しい，分かってもらえないときはつらい。特に親子関係では話し合いが必要ではないか。」

【自分のことと照らし合わせた】では，「絵本の視聴後は，１つの話として聞いていたが，物語作りをすることで，パオを自分のこととして考えるようになった。パオの気持ちと母親の気持ち，どちらも自分の人生と照らし合わせて振り返ることになった。自分がパオと母親のどちらにも重なるところがある。」「自分の心情と重なり泣きそうになった。自立できていない自分を感じた。物語作りをすることで，自分の思いを話すことになって，自分だけの痛みではないことが分かった。苦しく，悲しい気持ちが共感された。」「パオと母親の気持ちを真剣に考えた。同時に自分の家庭のことを考えた。親子の葛藤は，普通の家庭だったら必ずあることだと思う。すれ違いがあっても，話し合える環境の家庭でありたい。」「パオの話を自分のことに近づけることが出来た。現在の就職活動などで複雑な心情と絵本が重なり，今の自分のように感じられた。話の続きを考えることで，より深く絵本に触れられた。」「成長について考えた。親のところに戻ったパオは，そのことで後退するのではなく，さらに成長して自立の道が確立していくのだろうと思った。」【その他】では，「特に心情的な変化はなかった。」

８．考察

8.１　絵本『ぞうのパオ』視聴について【調査１】からの考察

絵本『ぞうのパオ』視聴の感想から，大半の学生が，「パオ」の立場（39名，79.6％）で視聴していた。自分のこととしてパオに感情移入し，また心情に寄り添っていたことが分かった。学生は日常において子どもの役割を取っているので当然の結果といえるであろう。しかし，３分の１の学生（18名，36.7％）は，母親の立場にも立って視聴したと回答している。絵本視聴ではR・Pと同様に学生が絵本を通じて心理的役割の変化を繊細に感じ取ることが出来たと考える。回答にもあるように学生が役割交換をして「子」の立場から，「母親」の立場に立って親子関係や成長のあり方を考えるきっかけとなっている。

学生の感想が示すように，絵本『ぞうのパオ』は「自分を映す鏡」の役割を果たしていると考えられる。鏡に映し出された姿は，「親に依存し，自立できていない」苦しさやその苛立ちの姿であると自覚した学生がいた。絵本は視覚的に表現され，一人で又は仲間と同時に視聴し，共通理解が図れ，視聴後にそれをもとにして話し合うことができる。共感さ

れたり，他者の中に自分とは違う思いを抱いたりして，絵本は自分自身を見つめるきっかけとなったと考える。絵本の内容は完結してない物語であるため物足りなさを感じたという感想が寄せられた。その思いがお話の続きを考えたいという自発性につながっていると考えられる。絵本の内容は親子のリアルな又は深刻な問題を扱っていたが，絵本の持つファンタジーの力によって親しみやすくなり，親子の問題に自発的に向かいやすくなったと考えられる。このように絵本には，自発性を高め，素直に問題と向き合えるようにする効果があった。

8.2　絵本『ぞうのパオ』のＲ・Ｐ的物語作り【アンケート調査】の考察

Ｍ１の回答では，大半の学生（41名，83.7％）が，自分で思いついたストーリーとなったと回答している。そのように回答した学生は，親子の「和解」や「自立」を望んだ学生であった。興味深いのは，「思い通りにいかなかった」の回答（25名，51.0％）では，「自分一人で作るのとは違い相手役によって自分の思い通りには行かなかった」とあり，関係と役割のおもしろさや困難さを感じ取れた学生もいた。物語作りは，役割を演じることによってただ絵本を視聴するよりは，他者とぶつかり合い自分の思いを実現するために努力しなければならない活動になったようである。自分の心情と照らし合わせて涙をこらえていた学生もいた。しかし，物語作りを仲間と行ったことで，仲間に思いを受け止めてもらうことができた。また，完結してないストーリーを完結させ満足したという感想は達成感につながっており，物語作りの効果であったと考える。

物語作りは，自分を振り返りつつ疑似的に他者と交渉し自分が求める成長を創造し獲得する行為であった。これらの活動の中に，社会的役割から心理的役割を構築するＲ・Ｐの要素が取り入れられたことが分かる。

活動後，就職活動等の心配を親に「相談してみよう」という自立の一歩を歩み始めている学生がいた。授業での自己変革が現実的に生かされた例といえる。気になる回答は「特に心情的な変化はなかった」というものである。答えた学生は頑なに自分から出たくないという様子がうかがえた。まじめで一生懸命な学生であるだけにかえって深い部分で何かを感じているようにも受け取れた。今後丁寧な対応を試みてみたい。

8.3　「絵本の視聴」と「Ｒ・Ｐ的物語作り」と「Ｒ・Ｐ」の比較

これまで行ってきた「絵本の視聴」と「Ｒ・Ｐ的物語作り」と「Ｒ・Ｐ」を，①設定の難易度，②自発性，③自己理解，④他者理解，⑤考察の仕方（方法），⑥指導者の専門性，の６項目に分けた（表１）。

表１　「絵本の視聴」と「Ｒ・Ｐ的物語作り」と「Ｒ・Ｐ」の比較

	絵本の視聴	Ｒ・Ｐ的物語作り	Ｒ・Ｐ
設定の難易度	設定しやすい	やや準備がいる	ウォーミングや十分な設定が必要
自発性	受け身的である	緩やかな活動であるが自発性が期待できる	積極的な自発性が期待できる
自己理解	自己確認	自己発見	自己創造（役割取得）
他者理解	相手の立場の確認	話し合いによる確認と発見	直接的な確認と発見
考察の仕方（方法）	自分自身で静かに行う	会話による緩やかなやりとりを通じ考える	予想もしなかった展開に対する即時的，身体的創造。意見交換で考える
指導者の専門性	特に必要ない	ある程度の専門的指導力が必要	専門的指導力が必要

絵本視聴によっても相手の立場に立って親子関係や成長のあり方を考えるきっかけとなっていたが，物語作りはさらに，Ｒ・Ｐと同じように相手の感じ方や思いなどを理解し自分の生き方を創造的に作っていく活動になったと考えられる。Ｒ・Ｐのように随時確認をすることよりも，物語を作る過程で許し合いがおこなわれ，舞台で演じるのと違い時間がかかる作業となるが，時間がかかる分，穏やかにゆっくりと振り返りと役割創造を行うことが出来る。授業という形式からすれば，より実行可能な方法かと思われる。また，物語作りは，その場に居合わせな

い場合でも，お話（作品）を後で読むことによって，演者の思いを，感じ，考えることが出来る。R・Pでは，その場で参加した学生自身が多様な役割（role）を獲得し，自分自身を客観的にとらえるための直接的なトレーニングとなる。参加者の目の前で展開されるので感情の交流が直接的に行われ，共有された強い感覚を持ちやすい。それは刺激的な体験となりえる。

体で表現するR・Pと話し合いを中心としたR・P的物語作りではその方法の違いから，人によって向き不向きがはっきりあると考えた。物語作りには，萎縮しやすい，身体的・心理的に大胆に自己表現することが難しい等の制約を感じやすい人であっても，のびのびと役割演技が出来るという利点があった。物語作りは最初の時点では，R・Pのウォーミングアップとなると考えたが，物語作りそのものにもR・Pと同様の独自の意義があると思われる。

9．まとめ

学生が教師としての役割を取れるようになるためには，教師としての社会的役割を取りながらも，人として感性豊かに子どもと向き合えるという心理的役割の向上が大切である。教師役割の宿命ともいえる知識の伝達は，とかく一方的な関係を作りやすい。しかし，本来の教師役割は，教師と子ども一人ひとりは違う考えをもっており，お互いに違う考えの中から人間関係の意味を発見する活動であると西村[9]が述べている。また，特に教師となる者は「教師が子どもの気持ち・心を診て，子どもが自分の気持ちを診る場面が重要である」[10]という。R・Pでは場面の設定が，教師（監督）の重要な作業になる。物語作りでは，最初に視聴する絵本が，場面の設定に相当すると考える。どのような絵本が，学生の成長を助ける物語作りに貢献できるか，今後も研究を続けていきたい。

10. 謝辞

本研究を進めるにあたり，千葉ロール・プレイング研究会とU大学の学生には多大なご協力を得ました。記してここに感謝いたします。

なお，本研究は，H26年度「植草学園大学共同研究」の研究助成費を受け行ったものである。

11. 引用文献

1）植草一世，大木みわ，木下勝世ら．保育者の専門性を高めるロール・プレイング活用―その意義と研修成果―．植草学園大学紀要．2012；4：27-36
2）外林大作編．誠信心理学辞典．誠信書房．1971；467
3）外林大作 監修．千葉ロール・プレイング研究会著．教育現場におけるロール・プレイングの手引き．誠信書房．1981
4）文部科学省中央教育審議会．資質能力向上特別部会．教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（審議経過報告）．2011
5）植草一世，西村正司．ロール・プレイングの発見的側面を絵本にする意味Ⅰ．日本心理劇学会．2008
6）J.L.moreno.N.D. “WHO SHALL SURVIVE? Foundation of sociometry, Group psycho therapy and sociodrama” Beacon House 1953; 42
7）山本淳子，岸本明子．教育実習生の役割演技行動とストレス反応，自己評価との関連，香川大学教育実践総合研究．2006；13：61-69
8）絵・文，植草一世，ぞうのパオ，手作り絵本館，2008
9）西村正司．学校教育におけるロール・プレイング．臨床心理学～特集　心理臨床におけるロール・プレイング～．金剛出版．2010；57
10）大平健．診療室にきた赤ずきんちゃん，新潮文庫．1994

植草学園大学研究紀要　　第７巻　47 ～ 57頁（2015）

B. Edu. Health Sci. UG Univ.　vol. 7, 47-57, 2015

Orginal Article

The Significance of Student Story-making, based on Role Playing: An Activity for Enhancing Teacher Quality in the Early Childhood Education Undergraduate Course

Kazuyo UEKUSA[1]　Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University
Norio ANNDO[2]　Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University
Ayaka BABA[3]　Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

In order to enhance teacher quality, Role Playing originated by Moreno has recently been attracting attention in the field of teacher training for Early Childhood Education. But as it is difficult to introduce Role Playing in its complete form into a class, we created a new activity as a preparatory activity for Role Playing. It is a conversational activity of three students in which each one takes an assigned role and cooperates with other members in making a story by continuing an interrupted story from a picture book. We tried to confirm the effectiveness of the activity. As a result of having carried out the activity in our class, it promoted personal growth through self-awareness and understanding others' feelings, deepened empathic relations with others, and mutual understanding of viewpoints. The effectiveness of the activity is similar to that of Role Playing. Therefore we regard it as worth introducing into the coursework for Early Childhood Education.

Keywords: teacher training for Early Childhood Education, Role Playing, Making story, picture book, personal growth

---

[1]　Kazuyo UEKUSA
[2]　Norio ANNDO
[3]　Ayaka BABA